

ぬい おり 縫と織 華麗なる日本染織の世界

根津美術館（南青山） 23. 12. 16～24. 01. 28



多様な織と縫（刺繡）は、染織品の加飾技法の中でも古くから日本では格式の高いものとして捉えられていた。刺繡は染と組み合わせられて小袖を彩り、重厚な織は能装束に多用されてきた。

「根津美術館」コレクションの礎を築いた「初代根津喜一郎」（1860～1940）は、古美術品の豪快な蒐集で名を馳せたが意欲は「染色品」にも向けられた。

本展は、喜一郎の収集品を中心に法隆寺や正倉院伝来の上代裂、袷袷や打敷居などの**仏教染織**、唐織や縫箔といった**能装束**、そして江戸時代の**小袖**まで幅広い時代の染織品の中から“織と刺繡技が光る作品”が展示されている。



《唐織 金地枝垂桜花車模様》 19世紀・江戸時代 1領 左図

八重の枝垂桜に花車を組み合わせた大ぶりの模様を、段ごとに向きを変えて現わしている。能装束の中でもとりわけ豪華なものが多いが、ことに平金糸を全面に織込んだ総金地の本作は絢爛さと格調の高さを兼ね備えている。

《着付 紅地鱗向い鳥丸模様》 17世紀・桃山～江戸時代 1領 右図

鱗文と向い鳥丸文を大胆な色づかいで大きくあらわした能装束で、渡し繡の技法や袖幅が身頃より狭い形態は当時の小袖の特徴を示す。表着の下に隠れる着付でありながら、全面にこった刺繡が施されている点が心憎い。